

アンジェラ・チェン著／羽生有希訳（左右社、2023年）

ACE アセクシュアルから見たセックスと社会のこと

松浦 優*

本書はアセクシュアルに関するルポエッセイである。約100名のアセクシュアルの人々（「誰にも性的に惹かれたい」人々、本書16頁）に対するインタビューをもとに、著者のチェン自身の実体験や、アセクシュアルに関する学術研究の知見も織り交ぜながら、アセクシュアルの人々の経験と、アセクシュアルを取り巻く社会の状況を描き出している。Part 1からPart 3の三部構成で、アセクシュアルに関連する論点が幅広く取り扱われている。

Part 1ではアセクシュアルについての基礎知識が扱われる。とはいえ用語集的な形式での解説ではなく、具体的な経験や出来事を軸にしなが、適宜用語の説明を織り込んでいくという構成になっている。第1章では、チェン自身がアセクシュアルを自認するまでのプロセスを描き出しつつ、基本的な用語の意味や、アセクシュアルというラベルの意義について説明される。第2章では、アセクシュアルのコミュニティの歴史や、性的惹かれ（あるいは他の様々な惹かれ）という概念について説明される。第3章では、アセクシュアルの周縁化を捉えるための概念として強制的性愛について解説され、とくにアセクシュアルと男性性の関係について議論されている。

Part 2ではインターセクショナルリティが主題化される。第4章では、いわゆるセックス・ポジティブなフェミニズムが単純化されたものとしての、セックスすることを女性の抑圧からの解放と同一視する風潮に対する批判がなされる。第5章では、アセクシュアル・コミュニティにおける白人中心主義的傾向が批判的に検討されるとともに、人種をめぐる規範やステレオタイプとセクシュアリティとの絡み合いについて議論される。ある人種の人々が過剰に性的であるとされることや、逆に性的でないと言われる状況があるなかで、有色人

種のアセクシュアルが被る困難が描き出されている。第6章では、病や障害とアセクシュアルとの交差について議論される。一方で、アセクシュアルであることは性機能障害や精神病理とみなされてきたため、アセクシュアル・コミュニティのなかでは「アセクシュアルは病気ではない」と強調されてきた。他方で、障害者は性的存在であるべきでないという社会的圧力を被ってきたことから、「自分たちはアセクシュアルではない」と強調してきた。ここには一見すると対立があるように思われるかもしれないが、両者を強制的性愛における表裏一体な問題と捉えるべきだと指摘される。

Part 3では、アセクシュアルの観点から他者との関係（とくに性的・恋愛関係や親密関係）の捉え直しが行われる。第7章では、恋愛とは何なのか（そして恋愛とはどういうものだと社会で想定されているのか）を問い直しつつ、アロマンティックについて掘り下げながら、エリザベス・ブレイクの言う恋愛伴侶規範（*amatornormativity*、「恋愛的な愛が不当に崇め立てられ中心化されること」本書272頁）への批判が展開される。第8章では、セックスへの同意について議論される。「レイプはセックスではない」というスローガンがしばしば使われるが、両者の間には連続性があり、たとえば同意はあるものの望んでいるわけではない性交渉もまた問題をもたらしうる。そのような点に注意を促しつつ、同意の交渉について「ヘンタイのコミュニティ」（本書312頁）における交渉の実践も参照しながら議論がなされる。第9章では、アセクシュアルとアロー（アセクシュアルでない人）との交際についての事例などを取り上げつつ、社会における支配的な「性的筋書き」（本書323頁）について批判的検討がなされる。第10章では、トランスでありアセクシュアルであるとい

* 九州大学大学院人間環境学研究院学術協力研究員

う人物のライフストーリーをもとに、アセクシュアルであることとジェンダー・アイデンティティの探究とが不可分に絡み合う事例が取り上げられる。最後に第11章では、アセクシュアルの運動の方向性について、強制的性愛への抵抗に関する議論がなされる。

本書で特筆すべきは、強制的性愛という社会規範への批判が主題的に取り扱われていること、そしてインターセクショナルリティへの注意を促す論述になっていることである。アセクシュアルという少数の「変わった」人がいるという扱いは決してなく、マジョリティを含む社会の成員すべてに問いを投げかける内容である。さまざまな領域の研究者もまた、こうした議論を引き受けていく必要がある。また研究者にとっては、注で挙げられる参考文献も役立つはずである。

重要なのは、本書の問題提起を受けて、日本社会についてどう考えていくか、ということだろう。日本でもアセクシュアルについての調査や研究は徐々に蓄積しつつあり（たとえばCiNiiなどで「アセクシュアル」や「Aro/Ace」などと検索すれば見つかる）、こうした研究は、ある意味では近年になってようやく出てきたとも言える。しかし同時に、アセクシュアルという言葉を明示的に使っていない研究のなかにも、アセクシュアルや強制的性愛に関連する研究は含まれている。人種とセクシュアリティの交差や、障害とセクシュアリティの交差についても、日本での研究蓄積は存在する。こうした蓄積を引き継いで、位置づけな

おしていくことが、アセクシュアルをめぐる議論にとって必要であり、その際のヒントとしても本書は役に立つだろう。

そのようにして本書の議論と日本社会の状況の共通点に注目することも重要だが、他方で本書は英語圏の事例を論じているものであるため、日本社会との相違点もあるかもしれない。たとえば本書では強制的性愛の典型例としてセックスレスへの恐れが挙げられている。もちろん日本にもこうした言説は存在するが、それ以上に、日本語圏では少子化への懸念という形で強制的性愛が表出することがあるように思われる。こうした仮説の検討を通して、単に英語圏での研究を当てはめるのではない、日本社会の具体的な状況を明らかにしていくが必要になるだろう。

最後に、本書を引き継ぐ試みの一つとして、2023年11月1日に本書の刊行記念イベントとして開催されたトークイベントを挙げておきたい。このイベントのなかでおこなわれた議論はウェブ上で紹介されているため（岩崎 2024）、本書を読むうえでも参考にさせていただければ幸いである。

参考文献

岩崎はなえ, 2024, 「フツウの恋愛、性愛ってなに? 『ACE アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』刊行記念トークレポ——羽生有希×中村香住×深海菊絵×松浦優 性に関する研究者たちが語ろう」me and you little magazine & club, 2024年3月28日取得, <https://meandyou.net/202401-ace/>